

36 駢巖雜舒墜
37 乱条迸石嶺

巖並に咲きつ散りつつ
枯みだれ石嶺に迸り

巴

巴重「先生。ごらんない。二頭立ての馬車みたいなあの巖を。いちめん花が咲いて、はらはら散って……。運銭あしげ、といいたところですが、いまのお話をきいてみると、孔子の子孫の宅の壁からぼろぼろ出てきたという文献みたいな気がしますね。権力者の弾圧で、一時、地上からくくれた本だと聞きましたか。」

なるほど、それはおもしろい。奉礼郎だったとき、役所で「水経注」という本をみたことがある。その巻十五、洛水の条に、このあたりのことが書いてある。八洛水はまた東して白馬溪水に含す。水は宜陽の山澗より出で、大石あり、その状は馬に似たり、故に溪澗は物色をもつて名を受くるなり。……洛水また東す。昌澗水あってこれに注ぐ。水は西北宜陽山より出でて東南流す。……と。わたしは、あの巖の形から、ぼんやりそのことを考えていたのだが、お前のことばで、連想が、もっと適切な文献に結びついた。

漢代に、魯の共王で劉余という人がいた。宮殿をひろげるつもりで、となりの孔氏の旧宅を買って、こわすやうとしたら、壁の中から、古代の音楽がきこえる。おどろいて、こわすのをやめた、という。こわすのをやめた壁から本が出たというのはおかしいが、壁をやぶって本が出て、そのあと音楽がひびいた、ということだろうか。

ところで、後漢の王逸、楚辞のすぐれた注をかいたひとだ。その王逸の子に、王延寿というひとがいた。かれに「魯の靈光殿の賦」という文がある。その序にいう。

魯の靈光殿は、けだし景帝と程姫の子なる恭王——文選にはこうあるが共王のことだ——余の立つ

るところなり。もと恭王はじめて下國に靜し、好んで宮室を治む。かくて魯の僖公の基兆によりて管めり、漢の中ごろ、盜賊の奔突するに遣い、西京の未央・建華の殿よりみな壞せらる。しかるに、靈光は巍然として独り存せり。おもつに、臺に神明の依憑支持して、漢室を保つものにあらずや。しかれどもその規矩制度の上は星宿に應ずるも、亦た永く安らかなるゆえんならん。われ、南の鄒より、戟を魯に見んとし、これを觀ておどろいて曰く、ああ詩人の興は物に感じておこる。故に奚斯の魯を頌する、その路寢を歌い、しかして功績は終に存し、德音は声に昭なり。物は賦をもつて顯われ、事は頌をもつて宣ぶ。賦にあらずんば、何をもつてか述べん。かくて賦を作る。

※「鄒より」の下に「客し」を加える。

景帝の子は十三人。王氏の生んだ帝があとを嗣いだ。武帝だ。共王は、序にいうように、程氏の子で會に封ぜられた。「好んで宮室苑囿阿房を治め、今年に言を好んで詩を好まず」と史書にいう。當時、武帝をはじめ皇室には好學のひとが多かつた。それらの間で、このように記される共王は、おろかなひとのようにも見えようか。じつは、かれは知音だつた。「詩を好まず」とは、もっともらしい理屈をこねて、おのれの欲望おのれの権力を正当化する多分の人を、好まなかつたのだらう。幼時どもりだつたわたしには、かれの氣持がわかるような氣がする。孔子をかつぐ連中のところ、先秦の書があらわれず、詩を好まめ共王のまへに出現し、おまけに古樂がひびいたとは、妙ではないか。わたしが「苦靈調笑引」にうたった、景帝の遣した苗が、雀舞の祠からとび出したみたいだ。

話すとぶが、「物は賦をもつて興われ、事は頌をもつて宣ぶ」ということはいい。いぜん「君樂府に唱するにあらずんば、誰か賦らん秋の深きを怨むるを」といつてくれたな。お前のあのことは、まさに王延壽の表現論に匹敵する。

さて、わたしが「魯の靈光殿の賦」をひくのは、お前が孔叢の壁中の書をいい出したからで、そうして、その賦のなかに、お前がこの昌谷の窮壁を形容したことばとそっくりの句があるのだ。すこし長くなるが、前後あわせて、聞かそうか。

かの靈光の状たるを見るに、すなわち嵯峨靡麗、危魂嶮嶮たり。ああ畏るべきかな、その人を賦かすや、……その崇き墟は岡のごと建りて、もつて彌のごとつづぎ。朱闕は蔚蔚として双立し、高門は闐

闇に擬し、二つの軌をならべて並び入る。ここにおいてかすなわちかの太階をへもつてその堂にいたり、俯仰鏡照して東西におどろく。形影の飾いたすらに何をかなさん。結澹野、流離爛漫として、皓壁曉曙しても、月のごと照り、丹柱款詭して霞のごとひらめき、霞のごとまたらに雪のごとさかんに、くもれるがごとく、遠溪晴乱、樟檜檉檉たり。陰夏にかくれても、中におれば、雲霧霞としても、つて岬岬たり、鴻穢坑としても、つて樓閣たり。颯蕭余としても、つて清冷たり、滴瀝を動かしても、つて響をなし、駭雷充じてそれ驚くがごとく、耳嘈嘈としても、つて聒を失ない、目眈眈として積を養い、密石と琅玕とを駢べ、玉璫と璽英とを齊しくす……

もとより建築物の形容だ。しかしそれが、わたしたちが歩いてゐるこの山溪に、なんと似てゐることだろう。「密石と琅玕を駢べた」ものは、まさしくお前のいう「二頭立ての馬車みたいな殿」ではないか。そこに、文猷が、咲く花ちる花のようにこぼれ出た、と見立てれば、「駢巖雜舒望」だ。巴童「巖並に咲きつ散りつつ、はそれでまきました」が、あの石の嶺に近るように乱れたしむとまで壺光殿の賦とやらにあるわけではないでしょうわし。

それがあつたのだ、まあ聞くがいい。

「ここにおいて詳らかにその棟宇を察し、その結構をみれば……かさなれるマスガタは礫侏としても、つて衰哉し、曲れるマスガタは要紹として環句し、芝栢は鬱羅しても、つて敢香し、枝棠杈枒として斜に傾り、傍に夭矯しても、つて極出し、互に黝糾して搏負し、下は崢嶸としても、つて瑤鑑し、上は崎嶇として重注し、捷嶽として鰐のごとく集り、支離として分れ赴き、縦横に駢駢して各々、趣くところあり。

がそれにあたるだろう、第二十八句「山実垂棘紫」のところ、引いた謝朓の「剡中書に和する詩に巖余あるいは傍之に竊之」という句があつた、それもここに句わせてよいが、まあお前のうぶなことは、そのまま詩句に仕立てたほうがよい。すなわち「亂條逆石嶺」だ。

巴童「むつかしい文章をやたらに持ち出されては、ぼう。としてしまつて、先生のおっしゃること、合っているのやら合っていないのやら、さっぱりわかりませんが、まあいいのだとしておきましよう。先生の番です」

小人は大論をきく耳をもたずにかやがやいう。あの島の湧き水に集って細い頸をふりたてざわめく鳥の群みたいなものだ。だが詩経の風の「泉水」に「悲たるかの泉水も、また淇のかわに流る」という。悲とは、泉のわき出るさまをいう。淇水は泉水がそそぎこむ本流だ。さらさらと湧いて流れるあの泉の水も、また本流の淇水に流れこむ」というのだ。つまり、ものは帰すべきところに落着くということだ。巴童「先生は、その詩がよほどお好きと見えますね。お忘れになったのでしようが、前にも、いちど説明してくださいました。なんでも、街のくにお姫さまが他のくへの殿さまに嫁いで、ときどき里帰りにしていらしたのが、両親がなくなつたので、もう帰ることができなくなつた。それをなげいて歌われたのだとか。そうだとすると、帰すべきところに落着くという先生のことばは、こじつけめいて、どうやら我が国に引くべき水が、上手でもれてしまつた嘆きの歌となりそうですわね」

「泉水」のこころは、たしかにお前のいう通りだ。しかし斷章取義、すなわち、古典のことばに郭たな意義を与えて使用するのには、わが国の学芸の伝統だ、いや、それがわたしの詩学だ、といえはよい。わたしは嫁いだ女ではないが、故郷をばなれて、役人生活を送つた。長安は、大きくて、見かけは立派なまちだが、そこには、スズメやカラスのような連中がむらがついて、日がな夜がな鳴きわめく。わたしは母上がおられるので、帰ってきた。ふるさとの山や川はさすがになつかしいが、ほんの三年ほどのあいだに、泉につどう属たちまで、めつきり都会すれして、うるさくなつた。

巴童「おや、翳ってきました。形勢のわるくなつた先生の理屈みたいに」

よつたね。ま、たこのところ、わたしは、ふるわな。なにしろ、日が傾いてきた。太陽でさ、之傾くのだ。詩人のわたしの論理がくもつてもむりはない。だが、見る！ 日脚あざやかにあらわれた、日がさせば翳はきえる。

巴童「うれしそうな先生の声。それで安心しました。霧は消えたが、新たに雲が出てきました。霧は光の反対のものとおっしゃいましたが、霧のかたまりの雲が、光とたわむれ、なんと華やいで美しいことでしょう。霧がそって、光もふかく感ぜられます」

なるほど、お前のことはそのままに、「新雲若華閑」とすれば、これけいい句だ。だが、理屈のほうは理におちた。

巴童「そうでしょうか。この夏の暑い盛りに、ギラギラ光るのではやりきれません。わたしはうがこの山歩きをはじめたのも、夏の光をさけるためでしょう。しんとしたこの静けさは、かげのおかげ。これはシヤレではありません」

「それとも、そのままいける。」「謠歌歌光」としたらどうだ。あまりに詩的で、お前の句らしくないかもしれないが、さで、わたしの番だ」

42 商風道清氣

西風ふけばたちまちすずし

夏

43 高眠服玉容

玉食して眠る御姿

夏のさかりのギラギラ光る太陽は、わたしはきらいではない。しかし、すすしいのを厭うわけでもとよりない。ここはお前に譲って、西風が吹いて涼しくなったのだ。としておこう。

巴童「西風を八商風」とされたのは、なぜですか」

楚辞・七諫の「初めて放たる」という詩に、
浮雲ひろがりて蔽暗すれば、日月をして光ながらしむ。忠臣ただしくして諫めんと欲すれども、諫諍こぼってかたえにあり。秋草さかえてそれまさに実らんとするに、微霜くだって夜降る。商風は肅として生を害し、百草は育てども長ぜず。

という。この商風を、注家は西風だと説明する。浮雲は日月を蔽い、諫諍は忠臣を毀つ。お前のいう通

リ、かけのおかげで、そつと冷たくなってきた。

巴重「清氣などとおっしゃって。それでは邪氣まんまん。弱氣なのが強氣なのかわかりませんね」
これも一種の断章取義、だがむしろ重層的表現とでもいっておくほうがよいかもしれぬ。そのしるしに、氣の字、他の句の文字とは、韻をすこしずらしてある。

巴重「昼間か、がやいていたお山も、すっかりくらくらしました」

あれは女几山。昌谷からは山坂つづきで、ついそこにお廟がある。この山は爾香神女が天に上ったところだと、いつたえている。お廟には、神女が遺した脇息もまつてある。このことは注に書きこんでおくほうがよいかもしれぬ。われわれの聯句、つごうでは神女にささげてもよいと思つたが、巻きおわらぬうちに夜になった。神女は王を食べて、もうおやすみになったかもしれぬ。わたしたちも、こよいはお廟でおこもりさせていたたこう。

44 焼桂何天几△
45 霧衣夜披拂

天几 あまぎ 香たきまつる
霧のころも夜半にひらめき

巴

巴重「ああ、おっしゃった通り、脇息がまつてあります。香爐にお香をたきますか」

まず、主の女神に進めるものだろう。
巴重「なるほど、そうでした。香をたいても、神女さまのお姿はほとんど見えません。さまよう夜霧が、天から降りていらっしゃるかたのなびくお衣みたいです」

46 眠壇夢鼻料
47 待駕棲駕老

天降 あまふり ます夢にねむらん
みゆき待ちおほとりは老い

第

玄宗朝に、岑参という詩人がいた。杜少陵どのと交際があった。少年時代に、二二から近い少室に住んでいたことがある。「梁判官の女几の旧壺に帰るを送る」詩にいう。

女凡は君の憶うを知り、春雲は帰るを相送る。草堂に茶甕を開き、茗壁より荷衣を取る。老竹は移せしとき少なりき、新花は旧の郊に飛ぶ。可憐なり真の傲吏、塵華の山に到るは稀なり。

わたしも蘭香神女を憶うて帰ってきたのだ、といえなくはない。わたしの友人には、岑参のような送詩を作ってくれるひとはいなかった。わたしはけっして、莊子のように達観した「傲吏」ではなかったから、当然だ。蓮の葉の衣を着、葉草箱をひらいて、隠者めいた日々を送ることになった点では、梁判官と同様だが、世俗の塵事は、昌谷の家にも山ほどあつて、ついうつとうしくて、女凡山にやゝてきた。インキ道士のことばを信じて、神仙になろうなどとは、おくびほども考えぬが、ほんのささやかな安らぎを求めて、このお廟の斎壇にねむるわたしの夢に、せめても神女があらわれてくれればよいが、巴重「先生、先生、夜が明けました。ムニヤムニヤいっていらしゃいました。夢でもごらんになりましたか」

神女と遊ぶつもりだった。だのにわたしは、ラーヴァナ夜叉王となつて、ランカー大城のまんなかで仏にむかつて立っていた。宝山は崔嵬としてそびえ、照り輝る光に千変万化した。諸峯のひとつひとつに仏があらわれ、菩薩があらわれ、ラーヴァナ夜叉王とその眷属があらわれた。隋の煬帝の迷楼には、すべての壁面に鏡を貼った部屋があつたという。そんな部屋のまんなか立ってまわりを見て、そこに垂々無尽にうつるおのれを見たとしても、あのときのわたしの驚きの足もとにもおよばまい、仏の説法がおわると、仏も、菩薩も、眷属も消えうせて、わたしはひとり茫然と立っていた。そのときお前が叩きおこしたのだ、そうだ、言い忘れたが、夜叉王の眷属の中に、たしかにお前らしいオツチヨコチヨイもいた。安心するがいい。

巴重「それはけっこうですが、オツチヨコチヨイは余計です」

きのう楞伽經の話をしていたので、こんな夢をみたのかもしれぬ。だが、この昌谷一帯が、楞伽の寧羅耶山だ、といえなくはない。わたしが、あるいはわたしの祖先たちが夜叉ならば、きょうは福昌宮に行つてみよう。あの離宮、忘れられた楞伽城とも、いえなくはなからうじゃないか。

巴重「目にはあいても、まだ夢の中にあられるみたいです。お話が幻めいて、心も醒めてゐるわたしには、わかりにくいですが、まあ、あてのない散歩、どこへでもお供いたしますよ」

谷のすぐ東が福昌宮。土地の人ならたれ知らぬ者もないが、知らぬ読者のために注をつけておこう。巴重「お話を聞いているうちに、もう着きました。これが離宮です。神女さまのお廟も荒れていました。が、ごらんなさい、屋根の青銅の鳳鸞を。なんだか、すっかり老朽行れてしまったみたいですね」この宮殿は、隋の煬帝がはじめて建てた。隋が滅亡して、忘れられたところだが、唐の第三代皇帝高宗の顯慶二年（六五五）に復興した。

二年まえの永徽六年（六五五）、皇后王氏が薨され、昭儀の武氏が皇后となった。則天武后だ。永徽七年正月、皇太子が薨され、武后の子が皇太子になり、顯慶と改元された。天子の権力は実質的には武后の手にうつりつつあった。福昌宮の復興もおそらく、武后の考えから出たことだろう。

銅鸞が、老朽化するまで、あのように待ちつくすのは、隋の煬帝の行幸をか。あるいは唐の高宗のか、則天武后のか。

煬帝は暴虐のひとといわれ、武后は奸婦といわれる。いま見たたちの見ることでできる史書からいえば、そういうことになる。しかし、煬帝にとつて有利な資料は、太宗の治世に抹殺され、武后を弁護すべき文献は、玄宗の代に散佚した。

太宗は英明の主といわれた。聖人に比するひともいる。けれども晩年、方士のことは迷って、不老長生の薬をさがさせた。その子の高宗は「いにしえよりいすくんと神仙あらんや。秦の始皇・漢の武帝、これを求む。生民を殫弊し、ついに成るところなし。はたして不死の人あらば、いまないすくにあらず」といったらしい。だがその高宗は、父太宗の妾であった武氏を皇后としているのだ。楊加経に八国王の身は無常ということがあったが、まったく、この宮殿をいとなんだ国王たち、隋の煬帝も、唐の高宗も、そして周という朝廷をひらいた女帝則天も、つきつきに、無常の風にさされた。巴重「無常の風にさされた国王たちの運命を、人間がなげこうとしないので、かわりにあの銅鸞が

いたんでいられるのでしょうか」

そうだ。そうだとし、人間は思考・感情をもつから有情という。銅鸞はそれをもたぬとかんがえられ、非情とよばれる。だがそれは、人間の側からする勝手な偏見だ。げんに、非情の銅鸞が、有情の人間のためになげいている。「金銅仙人辞漢歌」や「銅駝悲」を作ったのは、その偏見の虚妄をついたのだ。

ついたつもりだ。ところがあの詩をみてその一二を讀んでくれるのがあまりないようだ。おまえはさすがにわたしの日夜つきやうていてくれるので、そのことがわかるのか。いやそうではない。むしろ漢民族の奴隷としてつねに酷使に耐えてきた民族の一人であるお前だからこそ、それがわかり、そのお前をつねに身辺に見てきたために、中華意識が骨の髄までしみこんでいるわたしにも、非情のものの感情がみえはじめたのかもしれない。とはいへ、そんなことはかりいってはいへ、この瞬間、おもしろくならぬ。さあ、お前の番だ。

48 故宮椒壁垣

ふる宮の壁くづれたり

巴

49 馮麗散鈴響

ころろと鈴らひひけは

巴重「復興されたというのなら、そのとき、なつしりと、美々しく、建てなおされたのでしょうか。普通人さぞこへいったのやら、樓閣の壁もすっかりくずれています。この壁土はなんでしょう。普通のものとはちがいますね」

椒壁といつて、胡椒や山椒を泥にまぜて塗った壁だ。こうすると、部屋が、いい匂いがして、冬は暖かいということだ。皇后の部屋は、椒壁にする、といわれている。こゝは位置からいって、主の住むべきところ。さうだとすると、復興してこゝを戻ったのは武帝であること、ほとんど疑いない。

巴重「おや、カランカランと鳴ってます。なんでしょう」
軒の四隅に吊るした風鐸の音だ。あの涼しき音をきくと、夏の盛りとは思えぬ。まさに秋だ。

50 羈臣發涼思

流浪の臣にかなしむる

蜀

51 陰祿東朱鉞

藤のつる朱の鉞まき

巴重「羈臣、とはなんですか」
蜀旅の臣ということだ。すなわち、流浪の臣、あるいは、他国から来て仕える臣、というほどの意だ。

戦国時代の詩人宋玉に「九辨」という作がある。

悲しいかな秋の氣たるや、蕭瑟として草木搖落して変衰し、憊慄として遠きたびにありて山に登り水に臨み、まさに帰らんとするを送るがごとし。次寥として天高うして氣清み、寥々として源を收めて水清めり。惻愴としてますます薄寒の人にあたるをなげく。槍戟擐恨として故きを去り新らしきに就く。秋風として食士の職を失いて志や平らかならず。窮蹙として窮旅にして友生なし。燕は翩翩としてそれ辞歸し、蟬は宋漢として声なし。雁は雁雁として南に遊び、鵲は鵲鵲として悲しび鳴く。独り旦を申ねて寐せず、蟋蟀の宵征くを哀しむ。時は盛衰として中ばを過ぐ、ああ淹留して成るなし。

ここにいう窮旅は、流浪にあたるだろう。いまのわたしは「遠きたび」にあるわけではない。が、山に登り水に臨んでゐる。「志平らかならず」とはあえていうまい。けれども職を失った貧乏文士。宋玉は「窮臣」の語をそのままに使つてはいないが、かつて仕えて、いまの流浪をうたっている。わたしもいささかかれになぞらえて、窮臣といつてもよからうではないか。

他國から来て仕える臣、の用例はさらに古く、数も一ニにとどまらぬ。だがそのなかで、この番禺宮の所在地たる宜陽にちなむものがあるのだ。「戦国策」の秦の部に見える次のような話にだ。

秦の武王は、周朝にかわつて天下を取ろうと思つて將軍甘茂に相談した。甘茂は青の出身で秦に仕えた。すなわち歸旅の臣だ。

武王「わしは車で、三川を通り、洛陽に出て、周の王室をうかがいたいのだが、どうだろう。」

甘茂「それならわたしは魏にいつて工作したうえで、その隙りの韓をうちましよう。」

王は向壽を副使にした。甘茂は魏にゆき、工作をすすめ、向壽にいつた。

「きみはさきに歸つて王に報告してくれたまえ。魏は甘茂のいう通りになりました、しかし、韓を攻めないのでください、と。うまくいつたら、こんどのはみなきみの功績といふことにしよう。」

向壽は歸つて、甘茂のいつた通り報告した。王には事情がわからない。急いで甘茂をよびかえし、待ちきれずに息讓といふ地まで出迎えた。王が問うと、甘茂がこたえた。

「韓を攻めるには宜陽を取らねばなりません。宜陽は大県で、上党や南陽の地から納める租税穀物は

みな宜陽に蓄積してあって、糧食充分。名は果ても実績はそれに幾倍むして郡に匹敵します。いま勝阻を越え、千里の道を行き、攻めるのは、難事です。むかし魏の文侯が樂羊に中山を攻めさせたとき、三年かかって拔きました。樂羊が帰って功をのべると、文侯はだま、て手箱を示しました。中にはかれが不在中に、中傷した手紙がいっぱいはい、ていたのです。樂羊は申しました。わたしの功ではなく、わたしをお信じくださった殿のお力です、と。いま、わたしは羈旅の臣です。王の一族の樗里疾や公孫衍は韓とも親戚關係にある方です。二人が韓に肩をもつてわたしをそしめば、王はき、と目を傾けられましよう。それでは王は、魏を欺くことになり、わたしは魏の宰相公仲信から怒られます」

王は息諒の地で甘茂に、信じる、とちか、た。甘茂が攻めて五ヶ月た、ても宜陽はおちなかった。はたして樗里疾と公孫衍が中傷し、王の代は動搖して甘茂を召した。甘茂はいう。

「息諒の地はまだあるのですか。そこでのちがいをお忘れになりましたか」

まあこうして、それからあともいろいろないきさつはあるが、甘茂は宜陽を抜いた。宜陽の戦いは、甘茂にと、ても、秦にとつても、死活とところをかえる重大な契機だった。わが祖吳国公の徐敬業討伐と、きわめてよく似たケースだ。

甘茂は外來の臣だが、宜陽の地を餌として秦の宰相となり、秦を強大にしたが、武王なきのち、放逐され、齊にかえった。吳国公は、討伐に成功して武公を女帝としたが、女帝のいるうちに、流されて海南の島でなくなった。

吳国公は、唐の皇族であつたから、武后にとって外來の臣だった。わたしは吳国公の子孫であるがゆえに、唐の朝廷に仕えながら、しばしば外來の臣のように見られたものだ。宜陽の希昌宮で、いにしえを憶い、いまを想い、淒涼の思いにたえないとしても、ふしぎではないだらう。

巴童「こもともではありますけれど、餌で釣ったり、ことばで言いくるめたり、というあの政治家たちの舞台、わたしは好きになれません」

わたしも、それは好きではない。好きではないくせに、役人稼業をしてきた人間の余習で、なにかと、いうと、あのどろどろとした世界がこぼれに洩れる。木かけの藤曼な、朱い鉄前にまきついている。あの罪のむこうに、権謀術数をぶちこんで、びっしりしめておこう。

52 龍帳着魘魘
53 碧錦帖花裡

龍帳にけ魘魘つきたり
綾錦けななく裡柳

巴

巴童「きょうの先生は、きのうとは違ってかわった毒直でですね。権謀術数とやらは、すきではありませんが、先生のおっしゃる通りに、そんなにうまく閉じこめたりすることができるものでしょうか。天下わけめの戦いがなんともあった宜陽の暴徒が建て、女帝が再建したという福昌宮は、やっぱり権謀術数という幻の上にきずかれた幻の宮殿。ごらん下さい、そのとほり。権力のシンボル竜の模様、まざまざと妖怪めいた顔をつき出しているではありませんか」

「これはまた、きついね。
巴童「門前の小僧です。先生の政治批評を、しよっちゅう聞かせていただいて……。ところで碧の錦地に花さくかわやなぎを織り出したのけ」

54 香食寧殘貴
55 歌塵盡水在

にほふしとわみたまに仕ふ
歌やみて染に塵みち

蝶

その香がわしいしとねは、かつての主が使ったもの。のこして去った主の霊に、いまもはえているのだらう。隋の煬帝は、迷楼の鏡の部屋に、慕恋の女をいれて、その微細処まで写し出されるのを楽しんで、だというし、則天武后は、壮大な陽根をもつ男を、坊主に仕立てて寝所に入れたという。

巴童「かたくるしい世界から、これはまたなまめかしい世界へ。とんだ転向ですね」

政治と性とはつきものさ。ああいう話いどこまでが本当かは、わたしは知らぬ。いずれ、なにがしかは、かれらから権力を奪った側のデッチアゲだろう。わが唐の聖帝太宗だって、兄弟を殺したあげく、その妻を妾にした、中興の英主玄宗が、息子のよめを奪ったのが楊貴妃だったこと、たれ知らぬ者もない。その閨房の秘戯は、竜の模様の政治のカーテンがかくしている。

巴童「それでは、長恨歌というはやりうたも、政治のカーテンのひとつですか」

すこいねえ。あの作者の本質を、お前のいまのひとことほど、ピタリといひあてた者を知らないわ。
いや、これはお見それした。お前は一流の文芸批評家、いやいや、文明批評家だ。

巴重「おどかないでください。先生の口車にのって、ついうかうか、心にもないことをしゃべりま
した。カーテンの中では心をどろかす歌がうたわれたことでしょうか。歌にあわせて妙なる舞いもまわれ
たでしょう。その歌と舞いとを、お聞きしたいと思つたのです」

漢の代に、魯のひと魯公、発声清哀、そのうたごえけへだつたうつばりの塵を動かしたという。成
帝の皇后趙氏は、舞えば燕のように軽やかだったので飛燕とよばれたという。二このカーテンの中でう
たつた声は魯公にまさり、舞いは飛燕をしのいだかもしれぬが、梁はむしばまれ、塵はこべりつき……

56 舞絳長雲似
57 玲瓏割錦段

舞ころも旗雲なせり
絳毯に似てはしきわが里

巴

「歌つたひととはどこへいったのでしょう。舞つたひととはどこへいったのでしょう。先生、ごらんなさ
い、窓のそとの空にたなびくあの旗雲を。あれはきつと舞い衣、人間の世界のあつくるしさに堪えかね
た舞い姫が、宴席をのがれて、ひらひら空にのぼっていった。その衣ではありませんか」

「そうだ、わたしたちは、いつまでも権力者たちのうごめいた宮殿のなかに閉じこもっていることはな
い。お前の「露衣夜振拂」からはじまった夜の幻想が、お前の「舞絳長雲似」でしめくくられたのも、
おもしろい。目ざさめて心のさめなかつたのは、この句を待っていたのかな。さあ出発だ。」

巴重「玉のように美しい土地、よく耕された畑は、まるで絳毯を切つてはりつけたみたいですね」
たしかに美しい。ところで、こうした畑を見ると、都会人はよく、自然は美しい、という。だが、自
然は、美でもなければ醜でもない。自然そのものは美を目ざしはせぬ。そこに人間がほみ、労働がと
のえて、自然は美しくなるのだ。いわば、人間と自然とが協調するところに、美があらわれるのだ。労
働が加わらなければ、荒山か密林になる。こういうと、気の早い連中はさうよく人間の力、つづいて政
治の讃美をやりはじめたろう。宜陽はしばしば戦場となり、戦火は山や谷の形さえかえた。人間の力